小箱のモチーフ
―『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』について―

木田 綾子*

The Motif of the Box
― In Goethe's *Wilhelm Meister's Wanderjahre* ―

Ayako KIDA*

Several boxes appear in the novel *Wilhelm Meisters Wanderjahre oder die Entsagenden*. However, no one knows what is in the box found by Felix, Wilhelm's son, because its lid always remains closed. Although Hersilie, in whom Felix is interested, later takes the key, the contents are not revealed until the end. A small box in which a little princess lives also plays an important role in *The New Melusine*, one of the episode in *Wanderjahre*, In contrast to Felix's box, which is kept secret, the secret of the princess's box is easily revealed.

Goethe calls the novel *Wanderjahre* "little books" in a letter. The word reminds us of "Prachtbüchlein". Felix's life, as his little box shows, remains undecided. It is the little book that is never written, but the end of the novel seems to hold out the possibility that the little book will follow on from the novel. Felix's box thus shares in the novel's unfinishedness.

１．はじめに

ゲーテ晩年の大作である『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代――あるいは諦念の人々』(1)(1829)には、作品全体を通してたびたび小箱のモチーフが使われ、それぞれが重要な意味を成す。(2) 中でもヴィルヘルムの息子であるフェーリクスが見つけた小箱は最も大きな役割をはたす。彼が好意を抱くヘルジーリエが後に鍵を手にするものの、蓋が開かないため中身は分からないままである。小箱と鍵の関係は、男女の関係、つまりフェーリクスとヘルジーリエの関係を示唆していると解するのが、これまでのゲーテ研究における定説であった。(3)

小箱のモチーフに着目した研究の中で、最も重要な論を展開した一人であるヴィルヘルム・エムリッヒは、このモチーフが示す男女の関係性に着目しながらも、『遍歴時代』における小箱が象徴するものは「恋愛、情熱、責任、諦念など、このロマーンの主要な問題と、極めて密接に関連している」とも指摘し、小箱のモチーフは何か一つを暗示しているのではなく、「あらゆる領域を包括する」ものと分析した。加えて、小箱と鍵とを、ゲーテが『遍歴時代』の中で使用している単語を用いて「ポエジーの公然の秘密」であるとも論じた。エムリッヒによれば、小箱と鍵は開くものと閉めるものを象徴するため、この二つは象徴的なもの自体を象徴する。外面的には意味のない小箱と鍵にすぎないが、その中には極めて多くの意味を含むため、これらはあらゆるポエジーの象徴の象徴であるとエムリッヒは結論づける。(4) 本論は「あらゆる領域を包括する」という彼の論を支持しながらも、フェーリクスの発見した小箱と「新メルジーネ」の小箱とを関連づけることによって、小箱の「公然の秘密」を別の観点から論じたい。(5)

「新メルジーネ」において、小人の姫が暮らしているのも小箱の中であった。秘密が守られるフェーリクスの小箱と、秘密が簡単に暴かれる小人の姫の小箱とは、その対照性ゆえに決して無関係ではない。「新メルジーネ」が挿入された第三巻六章に続く七章に、小箱について報告するヘルジーリエ

令和4年1月11日受付　（Received Jan. 11, 2022）

*　新居浜工業高等専門学校一般教養科（Department of General Education National Institute of Technology (KOSEN), Niihama College, Niihama, 792-8580, Japan）

の手紙が置かれていることを指摘し、二つの小箱の関連性について考察を深めたのはアーター・ヘンケルであった。彼は、フェーリクスの小箱はヘルジーリエとフェーリクスの愛を象徴するものと断言する。これが開かれないままであるのは、諦念するヘルジーリエに秘密に対する心構えができていないためとした。その一方でヘンケルは、すぐに中身が暴かれ宮殿だと分かる「新メルジーネ」の小箱のもつ複数の意味を提示しながら、諦念の観点から小箱を分析した。(6)

これらに加えて、フェーリクスの小箱は「本」に、「新メルジーネ」の小箱は「書き物をする机」に例えられていることから、このモチーフには「書かれたもの」や「書くこと」との関連も指摘されている。(7)

本論はこれまでの研究を踏まえながら、「あらゆる領域を包括する」小箱モチーフの解釈の可能性の一つとして、二つの小箱が『遍歴時代』の構成と密接に関係している点を明らかにしたい。まず、二つの小箱が「書かれたもの」や「書くこと」に関連する点を確認し、両小箱の類似点と相違点を分析することによって、フェーリクスの小箱が彼の人生を示唆している点を明らかにする。フェーリクスとヘルジーリエとの恋愛関係とは別の観点から、小箱モチーフの解釈に一つの新たな見解を示す。

２．小箱と本の関連

フェーリクスが小箱を見つけたのは、「巨人の城」と呼ばれる峰の、複雑に入り組んだ岩の裂け目の先にあった洞穴の中である。壮大な自然の中で、この小箱が発見される場面で描写に用いられる単語が興味深い。

> とうとうこの大胆な子は、急いで裂け目から出て小箱を持ってきた。それは、小型の八つ折り本ほどの大きさはなく、見た目は豪華で古くさいものの、金でできているようであり、エナメルで装飾されていた。「お父さん、それしまっといて、誰にも見せないでね」。それからその子が早口でした説明によると、内的な得体のしれない衝動に駆られて裂け目の中へもぐりこみ、下の方で薄明るい空間を発見したとのことだ。そこに鉄製の大きな箱があり、鍵はかかっていなかったが、蓋は持ち上がらず、わずかな隙間を作ることもできなかった。これをどうにかするために棒を持ってくるように頼み、つっかえ棒として蓋の下にあてがったり、くさびとして打ち込もうとしたりしたのだと言う。結局箱は空っぽと思ったが、箱の隅の方に美しい小さな豪華本(小箱；訳者註)を発見したのである。(302)

小箱の大きさを伝えるのに「八つ折り本」Oktavband、大きな箱の隅に置かれていた小箱の様子を伝えるのに「豪華本」Prachtbüchlein という単語が用いられている。この小箱には最初から書物の役割が課せられていたと言えよう。

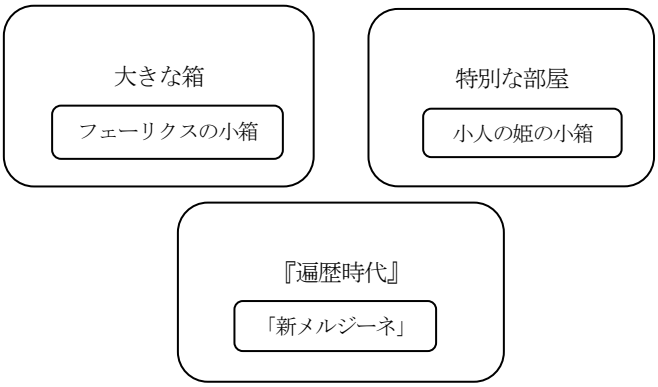
また、この箇所に関してエムリッヒは、ゲーテが作品の中で金を用いる際、知恵や生命力を表すことが多いため、金でできた小箱を発見したフェーリクスは、ここで知恵の実を口にして、幼い振る舞いをする少年から青年へ、つまり、知を探求する人間となると指摘した。(8) 実際、フェーリクスはこの後、ヘルジーリエに恋をしたり、教育州で学んだりする。つまり、小箱はこの時点で文学を暗示する準備が整えられていたと言えよう。それと同時に、この小箱がフェーリクスの成長とも関連していることが示唆されていたのである。

「新メルジーネ」の小箱にも、書く行為を連想させる比喩が用いられていた。小箱が宮殿になる個所においてである。小人になった男が小人の姫にもらった指輪で、姫がかつて住んでいた小箱の扉をたたく。すると、小箱は宮殿となって男の目に飛び込んでくるのだ。この様子は、当時の著名な工芸家であるダヴィド・レントゲン(1745-1807)の精巧な机に喩えられている。(9)

> たくさんのばねや仕掛けが一気に動き出し、書き物台や筆記用具、手紙やお金を入れる引き出しが一度に、あるいは次々と出てくるレントゲンの技巧の凝らされた机を見たことのある人は、(中略)この宮殿ができ上がっていく様を想像することができるでしょう。(652)

フェーリクスの小箱も「新メルジーネ」の小箱も共に、本や書き物台といった「書かれたもの」や「書くこと」に関連する比喩が用いられているのである。クリスティーネ・ループコルは、小箱に隠されているものの一つとして、レントゲンの机の比喩から「書く機能」を指摘し、恋愛なしでは何も書き得ないとして、書くことと恋愛との関連性について分析を行った。(10)

これまでの研究で指摘されている以上の点の他に、二つの小箱の共通点はまだある。フェーリクスの小箱が発見されたのが、「鉄製の大きな箱の隅」(302)だったのに対して、「新メルジーネ」の小箱は「特別な部屋」(636)のテーブルの上に置かれており、しかもこの部屋には鍵がかけられていた。小箱をあえて大きな箱の隅で発見させたこと、小箱があえて部屋のテーブルにぽつんと置かれていること、この類似性に本論は着目したい。大きな箱の中の小箱、部屋の中の小箱、これらは全体と部分の関係として、大きな話とそこに挿入された小さな話、別言すると、『遍歴時代』というロマーン全体と「新メルジーネ」という挿話とによる相似形をなすのではないだろうか。



「新メルジーネ」のジャンルと言えるメールヒェンの語源は作り話 Mär と縮小語尾 chen とから成り、そもそもメールヒェンは小話を意味する。大きな箱の中で発見されたフェーリクスの小箱が『遍歴時代』という作品全体における「新メルジーネ」と呼応関係にあるのであれば、小人の姫の小箱は中身が暴かれることによってフェーリクスの小箱の中身を暗示することにならないか。つまり、これら三者は、互いが互いを暗示し合いながら、その内実を示しているのではなかろうか。

３．秘密が暴かれる小箱と開かれないままの小箱

「新メルジーネ」の小箱の中身はあっさりと暴かれてしまう。男が見てはならないというタブーを犯して覗いた小箱の中にいたのは、小人の姫だった。その後、男は小人の国に連れて行かれ、小箱が実は宮殿だったことを知る。男は小人の姫と結婚し、しばらくの間楽しく暮らしたが、次第に妻、指輪、小人の姿、その他様々な束縛を疎ましく思い、それらから逃れることを真剣に考えるようになった。つまり、小箱の秘密を知った男を待ち受けていたのは、小人の世界に縛り付けられる不自由な生活だったのである。こうした束縛から逃れるために、男は指輪を削って小人の世界を抜け出すことを試みる。ようやく指輪を削って宮殿の外へ出ると、宮殿のあった場所には宝石箱がある。同時に鍵も見つけた男はこの宝石箱を持って旅に出かける。財産がなくなれば満たされる不思議な宝石箱を利用して、男は旅を続ける。しかし、最後は、もう一度中身が満たされることを恐れて宝石箱を売り払う。男はなぜ宝石箱を手放すのか。それは宝石箱もまた、男の生活を縛るものでしかなかったからである。好きな時に好きなだけ財産を使うことのできる生活は、食べるために働く機会を男から奪うことになる。宝石箱は、男が社会において何らかの役割を果たせる人物になることを妨げると言えよう。つまり、社会と個人の有機的連関を断ちきってしまうのである。それ故、男は最後に宝石箱を手放さざるを得なかったのである。(11)

「新メルジーネ」を自らの体験として語った男の職業は、理髪師である。宝石箱を手放した後の男の人生は、レナルドーによって物語る才能を認められ、理髪師として活躍している外枠の話につながる。小箱の中身を覗いたことによって、男は人生を決定づけられた。しかし、これを手放すことによって、男は社会において理髪師として生きる道を見出した。小箱の中を見ないようにという女性との約束をあっさり破ったり、お金を好きなだけ使ったりする、「諦念」という『遍歴時代』を貫く概念とは無縁と思われる男は、挿話の外では、諦念に至り理髪師として生きたのである。

一方、フェーリクスの小箱は最後まで、誰もその中身を知ることにはならない。発見されてから次に小箱が登場するのは、信頼できると思った収集家の老人にヴィルヘルムが小箱を預ける場面においてである。ヴィルヘルムが老人に小箱を開けてもいいかと尋ねると、老人は「あなたが生まれつき幸運で、この小箱に意味があるのなら、何かの折に鍵は見つかるはずです。それも予期せぬときに」(412)と意味深長なことを述べる。ヴィルヘルムはそれに従い小箱を開けることはしない。しばらくして小箱はヘルジーリエの手に渡り、老人の予言どおり鍵が彼女の手に入る。老人の言うように、小箱には何らかの意味があるから鍵は見つかったのだろう。これで、小箱の中身はいつでも見ることができる状態になる。しかしながらヴィルヘルムは小箱にほとんど関心がない。ヘルジーリエがいくらヴィルヘルムの関心を引こうと手紙で小箱と鍵の報告をしても、彼は「目下のところ、極めて真剣な仕事に取り組んでいたので、小箱の中に何が入っているかなど、ほんの少しの好奇心すらくすぐられなかった」(600)のである。

「新メルジーネ」では、小箱の中身を知ることによって男の人生が決定づけられた。とすると、フェーリクスの見つけた小箱もまた、人生を決定づけることに関係すると考えられる。ヴィルヘルムがこの小箱に無関心であったのは、「極めて真剣な仕事に取り組んでいた」(600)からである。具体的には解剖の研究であり、外科医としての人生を、ヴィルヘルムは送っている。つまり、小箱が人生を決定づけることに関するものであるのなら、真剣に取り組む仕事のあるヴィルヘルムにとってそれは、さほど重要ではないのである。

そうかといって、フェーリクスが小箱に多大な関心を寄せていたかというと、必ずしもそうではない。彼がヘルジーリエの前で小箱を開けようとした際も、単にヘルジーリエの気を引く方が重要で、小箱はその手段にすぎない。しかし、何らかの意味があるから小箱の鍵は見つかったのであり、しかもこの鍵を手にしているのはヘルジーリエである。言い換えれば、彼女がフェーリクスの小箱の秘密を守り得る立場にあるということだ。フェーリクスが小箱に関心を寄せていないのは、それなりの理由があるからではなかろうか。事実、『遍歴時代』全体を通して、フェーリクスが興味を示すものは大きく変化する。

まだ幼さの残る少年として作品の冒頭から登場するフェーリクスは、始め石に関心を持ち、ヴィルヘルムやモンターンに石について尋ねたりもしていた。実はこの小箱が発見される直前の章、つまり、第一巻三章において、ヴィルヘルムが礼拝堂の隅にあった別の箱を見つけている。こちらは蓋も難なく開き、中には美しい石がたくさん入っていた。これから連想して、フェーリクスが洞穴で見つけた小箱にも石が入っているかのような印象を受ける。実際、金も施されている豪華な装飾は、宝石箱のそれである。フェーリクスは地質学に通じているモンターンのような生き方を選択することもできたかもしれない。それはフェーリクスの将来の一つの可能性を暗示している。

しかし、フェーリクスはその後ヘルジーリエに恋をして、彼女に手紙を書くことと、すぐに彼女の元へ駆けつけるために馬に乗ること以外に関心を示さなくなった。ヴィルヘルムは息子の教育について思案し、理想の教育が施されるという教育州へと送りだす。ここでもフェーリクスは乗馬を学んで

いた様子が記される。ヴィルヘルムが外科医になろうと決めたきっかけが川でおぼれた友人の死だったのに対し、フェーリクスの志のきっかけは、いささか不純な印象が否めない。しかも、彼は馬に乗ることと書くことのどちらも上達したようには見えない。乗馬に関しては、馬を乱暴に乗りこなすことはできるようだが、最後は落馬して川へ落ちる。とても馬術の教官になっていたとは言い難い。『遍歴時代』にはヴィルヘルムやその他の人々の手紙も度々挿入されているが、そのような手紙としてフェーリクスが書いたものはない。彼が手紙を書いたのはたったの一度きり、それも二行だけである。

> フェーリクスはヘルジーリエを愛しています。
> 馬術の教官はまもなく来ます。(538)

これは石板に書かれたもので、異国人である謎の使者によってヘルジーリエに伝えられる。しかしながら、フェーリクスが書いたという文は、ヘルジーリエの手紙の中でヴィルヘルムに報告されたものであり、謎の使者とヘルジーリエの報告という二重の伝達により、どこか創作めいた、信憑性に欠ける点もぬぐえない。つまり、彼は教育州へ行ったものの、いまだ成長過程にあり、結局まだ何者にもなっていないのである。

フェーリクスの関心を示すものが移るのと並行して、小箱は複数の人物の手を経るが、最後まで小箱の中身は明らかにされない。小箱を手にする人物の一人であり、フェーリクスの関心事に影響を与えたヘルジーリエは、小箱を開ける鍵を手にしてもこれを扱えるわけではない。

「新メルジーネ」において小箱の中身を明らかにすることによって、フェーリクスの小箱の中身が推察される。前者の小箱の中身は男の人生を束縛するものだった。中身を知ってしまったがために男のその後の人生は決まり、これを手放さない限り、男の感じる不幸、すなわち社会との連関の中で個人が生きることが妨げられるという不幸から逃れることはできない。一方、後者の中身は、まだ決定されていないフェーリクスの将来の可能性を示唆するにとどまる。しかし、自分の将来にある程度関心を寄せてはいるものの、何一つ身についていないフェーリクスは、まだ何者にもなってはいない。進むべき道を必死になり模索しているわけではないフェーリクスは、その限りにおいて彼自身の将来にそれほど大きな関心を示してはいない。結局、自分の歩むべき道にいまだ無頓着なフェーリクスの心の有り様は小箱への無関心として現れているのではなかろうか。

フェーリクスがこの後どのような人生を送るのかは、未知数である。ヘルジーリエとの恋愛も、完全についえたわけではない。鍵は折れてしまっても、折れた表面はすべすべしており、秘密に通じた金細工師によって再びくっつけられたからだ。この金細工師によって小箱は一瞬蓋が開くが、このような秘密にはあまり触れない方がいいとして、すぐに閉められる。結局、小箱の中身は明らかにされないままである。これが、このロマーンにおける小箱をめぐる最後の場面である。いつでも開くことが可能な状態で小箱の最後が描かれていることは、『遍歴時代』の構成と何らかの関連を有するのではなかろうか。

４．開かれない小箱の秘密

フェーリクスの教育がなされる教育州の監督は、見学に来たヴィルヘルムに、教育州での生徒たちの身振りを使った挨拶の仕方が異なるのは、教養の段階によるものであると説明する。子どもたちは、その子に応じて役に立つことが教えられ、そのようにして教えられたことについては、子どもたち同士であってもしゃべることが禁じられている。これに関して監督は次のように言う。

> 秘密には非常に大きな利点があります。というのも、万事において何が肝要なのかとすぐに聞かされたり、いつも聞かされたりすると、たいしたことではないかのように思われるからです。ある種の秘密には、それが公然のものであっても、隠され沈黙が守られると、人は敬意を表さざるを得なくなります。(416)

「公然の秘密」という語は、『遍歴時代』において別の箇所でも使われている。[12] この言葉はゲーテが好んで用いる単語の一つだが[13]、この監督の言葉は開かれない小箱の意味を解く一つの手掛かりとなる。

『遍歴時代』においてヴィルヘルムとフェーリクスは、よく似ている描写がなされている。父子だから似ているというよりもむしろ、双子のような関係だ。例えば、落馬したフェーリクスが川から救助され息を吹き返したとき、ヴィルヘルムとフェーリクスは、「冥府から光の国へと入れ替わる途上で出会ったカストールとポルックスの双子の兄弟のように」(745)抱き合っていた。この親子はヘルジーリエとの三角関係においても小箱の所有においても、入れ替え可能という印象をもたらす。彼女は父親の方に恋心を抱きながらも、息子にも惹かれている。小箱を発見したのはフェーリクスだが、父と子は小箱を発見した秘密を共有する。ヘルジーリエの手に小箱が渡ると、彼女は手紙で父親に状況を伝える。フェーリクスの発見した小箱でありながら、小箱の行方を把握していたのは常に父親の方であった。しかしながら、父親は報告を受けるだけである。人に預けた後は、フェーリクスのように小箱に触れた記述はない。ヘルジーリエを挟んで小箱の所有者がどちらなのかは判然としない。『遍歴時代』は、ヴィルヘルムの話であると同時に、フェーリクスの成長を描いた話でもあった。つまり、『遍歴時代』の中には、もう一人の主人公とも言えるフェーリクスの話が組み込まれているのである。二人で小箱を共有しながらも、ヴィルヘルムは父として小箱を管理しようとする。一方フェーリクスは、発見者でありながら、その管理を大人たちに任せているようだ。

『遍歴時代』はフェーリクスが息を吹き返したところで話は終わる。「諦念する人々」という副題のついた『遍歴時代』

は、諦念に至り、社会の中で自らの役割を探し、それに生きる様々な人々の姿を示す。しかしながら、未だ諦念に至っていない若いフェーリクスの未来を予感させる形で終わっている。作品全体では諦念が度々描かれながらも、最後は若者の無限の可能性で閉じられていると言えよう。ヴィルヘルムの物語はいつしか主人公が息子に入れ替わって別の物語へと移るのではないか。このような移り変わりにおいて、諦念に至った人生は無限の可能性を秘めた人生へと移行しながらも、再び諦念に至るのかもしれない。諦念に至った者にとっては公然である人生も、成長過程にいる者には秘密にされていなければならない。小箱を手にした大人たちが意図せずして秘密を守っていたことにこそ、開かれない小箱の中身の意味があろう。

フェーリクスのその後の人生が書物として描かれる必要もない。なぜなら、『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』が書かれた後にまた、諦念に至ることになるかもしれない人生を「万事において何が肝要なのかとすぐに聞かされたり、いつも聞かされたりすると、たいしたことではないかのように思われるから」(416)である。描かれる可能性を秘めながら、描かれないままであること、これは、いつでも開かれる状態でありながら、開かれないままだった小箱の最後の状態と同じである。

ゲーテは『遍歴時代』の批評をしたロホリッツに宛てた、1829 年 11 月 23 日付の手紙の中で次のように述べている。

> しかし、このような小さな本は人生そのものと似ています。複合的な全体においては、必然もあれば偶然もあり、先行するものもあれば後から加わるものもあり、成功することもあれば失敗することもあり、このようにして作品は一種の無限性を帯び、こうした無限性は、悟性的、理性的な言葉で捉えて表現することが、完全にはできないのです。(14)

ゲーテは自らの作品に「小さな本」Büchlein という語を用いた。本の縮小形であるこの単語は、フェーリクスが小箱を発見した際に用いられた比喩と同じである。本に例えられたフェーリクスの小箱、人生に例えられた『遍歴時代』という作品。したがって、この作品が人生に似ていると捉えるゲーテが小箱に表していたものは、フェーリクスの人生と考えられよう。小箱が開かれないままであることは、その後の人生という物語が秘密であることを意味する。但し、秘密ではあるものの、いつでも開かれる状態で小箱の最後が描かれているゆえに、『遍歴時代』という作品そのものが、開かれた構造をしていると言えよう。フェーリクスの物語は、別の物語として付け加えられる可能性を秘めているのである。

「新メルジーネ」の小箱は中身が示された。男が小人の国から逃れて手にした宝石箱からは無尽蔵にお金が出てきたことにより、対価としてお金を得る必要がなくなった。小箱の内実は、男の人生を決定づけるものであり、個人が社会との有機的連関において生きる機会を奪うものだった。言い換えれば、小箱の中身は、男の人間形成の発展を阻止するものだったのである。男は小箱をあえて手放す。このような諦念によって男が得たものは、自らの人間形成を自らの手に委ねた理髪師としての実人生だったのではないか。

「新メルジーネ」は、『遍歴時代』に収められたいくつかの挿話のうちの一つである。但し、他の挿話とは異なる点が二つある。その一つは、語られた内容がメールヒェンであることだ。しかし、メールヒェンでありながらも体験として語られることによって、『遍歴時代』の登場人物が経験した話という設定は、他の挿話と同様である。もう一つは、男女の情熱の描かれ方である。挿話の中で男女の情熱が描かれている点は他の挿話と大差ないが、その描かれ方が異なるのである。他の挿話の人物たちについては、情熱に迷い、葛藤する様が描かれているのに対し、「新メルジーネ」の男は、情熱を抑制することなく、女性の出す条件を守るわけでもなく、情熱の赴くままに行動し、最後は逃げ出してしまう。「新メルジーネ」は、『遍歴時代』に収められる挿話の体裁は整えていながらも、他の挿話と比べて異質である。そして、若い頃から構想していた「新メルジーネ」で用いられた小箱のモチーフを、『遍歴時代』というロマーン全体にも用いたところに(15)、このメールヒェンがロマーン全体の中で特別な役割を担っていることが推測される。小話としてのメールヒェンで描かれたのは、ロマーン全体に示されていた諦念という概念とは無縁の男の人生である。つまり、「新メルジーネ」は、諦念や社会との折り合いといったロマーン全体が向かっていたものとは全く異なる世界観が描かれているのである。(16)

先に述べたように、フェーリクスの小箱も「新メルジーネ」の小箱も大きな空間の中に置かれていた。この関係が長編小説に挿入された一つのメールヒェンとの関係に類似する。もちろん『遍歴時代』には多くの挿話があり、「新メルジーネ」一つに限らない。しかし、これは『遍歴時代』に登場する小箱や容器、入れ物の類がフェーリクスの小箱以外にも存在することに似てもいる。

小箱が小さな本であるなら、「新メルジーネ」もまたそうである。そしてゲーテが同じ単語を『遍歴時代』という作品そのものにも使用していることから、この大きな本も一つの小さな本と見なせよう。言うまでもなく、一つの挿話は「複合的な全体」(17)である作品の一部分である。その意味で「新メルジーネ」も小さな本であり、そこには中身が明らかにされた小箱を所有する、諦念しない男の人生が描かれている。諦念に至っていないフェーリクスの人生は、中身が明らかにされない小箱が象徴するように未知のままである。未知なる人生は描かれることのない小さな本として『遍歴時代』に付け加えられる可能性を残すと言えよう。このように複合的な全体と化した『遍歴時代』は、フェーリクスが大きな箱の隅に小箱を発見することで、「一種の無限性」を帯びるのである。

註

＊本論は、2015 年 3 月に九州大学大学院人文科学府に提出した学位論文の一部を加筆訂正したものである。

(1) 『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』（以下『遍歴時代』と略す）からの引用は，以下の版による。Goethe, Johann Wolfgang: Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden. In: ders.: Sämtliche Werke. Hrsg. von Gerhard Neumann, Bd.10. Frankfurt a. M. 1989. 引用の際は，引用文末尾の括弧内に頁数のみを記す。

(2) 本論で扱うのは,フェーリクスが発見する小箱と「新メルジーネ」に登場する小箱の二つである。この二つの小箱以外にも、例えば「五十歳の男」における若返りの術が詰まった化粧箱や,「裏切り者は誰か」の宝石箱など、小箱を連想させるモチーフが散りばめられている。容器の意味に広げるなら、外科医であるヴィルヘルムが携えている手術道具の入った鞄や、「五十歳の男」における美しい未亡人の紙入れなども含まれるだろう。ただし、本論でこれらは扱わない。

(3) 特にヘルジーリエとの関係は、1829 年の第二稿において強調された。1821 年の第一稿において小箱のモチーフはまだ、伝統的な怪奇小説や冒険小説に属するような、「秘密」を表していた。Goethe: im Kommentar zu *Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden.* Kommentar. S. 976.

(4) Emrich, Wilhelm: Das Problem der Symbolinterpretation im Hinblick auf Goethes „Wanderjanhre“. Deutsche Vierteljahresschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte. 26, 1952, S. 347ff.

(5) エムリッヒも「新メルジーネ」の小箱について触れてはいるが、「新メルジーネ」における男女の関係とフェーリクスらの関係の類似を指摘するに留まり、多くの分析はなされていない。Ebd., S. 347.

(6) Henkel, Arther: *Entsagung. Eine Studie zu Goethes Altersroman.* Tübingen. 1964, S. 85-93.

(7) Goethe, a. a. O., Kommentar. S. 955ff.

(8) Emrich, a. a. O., S. 346.

(9) 『ドイツ避難民の談話』にもレントゲンの作品が登場する。

(10) Vgl. Lubkoll, Christine: *In den Kasten gesteckt: Goethes ‚Neue Melusine‘.* In: S*ehnsucht und Sirene. Vierzehn Abhandlungen zu Wasserphantasien.* Hrsg. von Irmgerd Roebling. Pfaffenweiler. 1992, S. 49-60, hier S. 59.

(11) Ebd., S. 53ff.

(12) 他の箇所では、自然に関して用いられている。「自然がその美の公然の秘密を開くことによって、その最も相応しい解釈者としての芸術に、抑えきれない憧れを覚えずにはいられなかった」(499f.) 「バラが秘密の生の公然の意義を呼び覚ますように」(528)

(13) 「秘密」Geheimnis と「公然の」offenbar が組み合わせて用いられているのは、例えば、『ドイツ避難民の談話』に収められている「メールヒェン」にある。『西東詩集』では、「明らかな」öffentlich との組み合わせで使用されている。Vgl. Trunz, Erich: Kommentar zu Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten, Goethes Werke, HA, Bd. 6, S. 633.

(14) Goethe, Johann Wolfgang: Die letzten Jahre. In: ders.: Sämtliche Werke. Hrsg. von Horst Fleig, Bd. 11(38). Frankfurt a. M. 1993, S. 199.

(15) 「新メルジーネ」の構想は早くからあった。「箱の中の小さな女性」の構想は,1797 年 2 月 4 日のシラー宛ての手紙に記されている。Vgl. Der Briefwechsel zwischen Schiller und Goethe. Hrsg. von Emil Staiger. Frankfurt a. M. 1977, S. 353.

(16) 拙論「「新メルジーネ」の語り手—ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』について」，かいろす第 52 号，2014 年，1~13 頁参照。

(17) Goethe, Die letzten Jahre. a. a. O., S. 199.